



読売俳壇

矢島 渚男 選

むかしにも昔ありけり雛の顔

土浦市 平佐 悦子

【評】よく言い切ったと言いたくなる句である。すべての物事には由来があり、歴史がある。最近では雛を展覧することが流行しているが、雛の顔も時代で変わって来たことをこんなふうに詠んだ人はなかったようだ。箴言俳句の傑作かも知れない。

盆栽の名にも羽衣春の風

神栖市 桐本 博昭

【評】天女が衣を掛けた黒松の盆栽か。「羽衣の薄きに変はる今日よりは空蟬の世ぞいと悲しき」これは源氏物語の歌。晩年の心境か。子の摘みし土筆のはかま取る日向

姫路市 難波 佳代

【評】土筆は袴取りが大変。私は胞子の付いた上の部分だけを摘む。雨降らずキャベツは玉にならぬまま

東京都 江辺 聡

いま囀いた孫に教わる初音かな

つくば市 高瀬真砂緒

岩屋仏剛毅に在す木の芽山

島根県 高橋多津子

春の雪掻いて掘り出す消火栓

宮城県 梶原 京子

コップへ降る淡雪ごと呑む屋台

霧島市 内村としお

花吹雪恩師の卒寿祝ふ会

野田市 鈴木 武

春かなし歌碑遺すあゝ上野駅

青森市 天童 光宏

高野ムツ才 選

落第子眼玉で顔洗ひけり

北本市 萩原 行博

【評】今も落第はあるだろうが、「眼玉で」と顔を洗うまでとは、よほどシヨクだったに違いない。親に迷惑をかけたと泣き崩れた、半世紀前の記憶であろうか。見しことを語ったさうな雛かな

八王子市 梅沢 春雄

【評】雛は、その家に生まれ育った女の子と家族の幸せを、また、不遇、悲運も記憶している。夜、密かにそれらを語り出すかも知れない。吟行の草芳しき靴ならぶ

東京都 吉村 恵子

【評】春の原を散策して句会場に集合した。並んだ靴から踏んできた若草の匂いが立ち込める。それぞれの句にも春の匂いが充滿している。日が差していま片栗が反るところ

町田市 枝沢 聖文

不満なき暮しの不安春つれい

日高市 田辺 英男

若布美しあの三陸の海の色

神戸市 吉野 勝利

どんどこ木芽を囁く風太鼓

さいたま市 池田 雅夫

分かれ道別れ惜しんで大ふり

川口市 堺 典子

あいさつはどなたも雪のことばかり

三条市 星野 愛

先触れのひらりひとひら春の雪

所沢市 荻野才サム

正木ゆう子 選

青き踏む禿頭白眉歩く歩く

高岡市 野尻 徹治

【評】ぶつぶつ切れるリズムと、動詞の多さにより、ずんずん歩く様を表現。トクトウハクビという中七も音として面白いだけでなく、文字面から、歩く人の顔貌が想像できる。ものの芽のベランダ植えもへだてなく

横浜市 池末 亮輔

【評】周囲の草木が芽吹くと、時を同じくしてベランダの植物も芽吹く愛おしさ。工夫された中七・下五に無理が無く、情景がよく伝わる。さりさりと沙の音す春の湖

大津市 竹村 哲男

【評】沙とは水辺のごく細かい砂のこと。大津の方なので、琵琶湖畔だろうか。「沙」という表記も読みもゆかしく、言葉自体を味わいたい。雪を見る一番広いガラス越し

生駒市 国包 澄子

土竜塚に突かれ若草萎えにけり

東京都 松本 武雄

覗き去る目白も雛の客とせむ

稲城市 山口 佳紀

無一物無音なる寒寒波去る

岡山市 内田 一正

雛とは持ち物多し飾り終ふ

袖ヶ浦市 浜野まさる

げんこつを合わす別れや卒業子

さいたま市 秋葉 武彦

啓蟄や回転ドアに息合はず

横浜市 我妻 幸男

小澤 實 選

上履のかかとを潰し卒業歌

伊勢市 藤田ゆきまち

【評】「上履のかかとを潰し」という描写から学校に倦んだ生徒の内面を感じ取った。高校生だろうか。「卒業す」で流さずに、「卒業歌」で踏みとどまったのがいい。永き日や名画座を出てまたひとり

神戸市 山口 誠

【評】春の日に孤独をかこちつつ、名画座に入ったが、映画もすぐ終わってしまひ、さらに孤独をかみしめている。日永の孤独にあじわい。あたたかやドルチェワゴンの曳かれて来

加古川市 石村 まい

【評】ドルチェワゴンとは菓子に乗せたワゴン。この語からイタリヤンレストランのデザートとわかる。甘いものの好きにはたまらない時間。どなり声のやりとり続く野火佳境

高槻市 村松 譲

髪髪の毛の引張り合ひも卒園す

狭山市 小俣 友里

治露酒とていつもの酒や一人酌む

枚方市 秋岡 実

耕しへ先づはエンジン空吹かし

宝塚市 大曲富士夫

戦争はなくなりません蜆汁

東京都 岩崎 美範

池の面を蹴立てて鳥の帰りがけり

津市 渡辺 健治

赤虫の餌に食いつく諸子かな

守谷市 久保田洋二

ここからはひとり

短歌あれこれ 石川美南 (歌人)

保育園の卒園式前夜、子どもが布団の中で「心配で眠れない」と言い出した。お別れの言葉をうまく言えなかったらどうしよう。立ち上がるタイミングを間違えたらどうしよう。担任のまゆ先生へのサプライズが失敗しちゃうたらどうしよう！

蓋を開ければ何のことはない、式は大成の裡に終了。翌日「卒園式本当に終わったの？ 簡単すぎて練習だった気がする」と言っていた子に笑いつつ、成長ぶりを実感した。春の日のななめ懸垂ここからはひとりいけと顔に降る花

卒業シーズンになると決まっていた思ひ出す一首。散りかかる花びらは校庭の桜だろうか。二度と戻れない時を永遠に封じ込めた、眩しいほどの名歌だ。今日は、六年間通った保育園の最終日。明日からはもう小学生だ。桜も君の背中を押している。さすがにまだ、「ひとりいけ」とは言えないけれど。

盛田志保子



題字デザイン・イラスト

福田美蘭